

環境哲学—プロティノス—

奥田 穰 一

Environmental Philosophy—Plotinus—

Joichi Okuda

今日、世界的規模の環境（自然）破壊に対するわれわれの慨嘆はもはや常識となった。われわれの人生に決定力をもつのは、かつてのように過去ではなく、むしろ未来、すなわち破滅を予想させる暗い、不安な未来である。では、現代のわれわれはどのような哲学を必要とするのであろう。やはり、どのような哲学が環境（自然）破壊を推し進めたのかを考えてみる必要がある。むしろこれは決して容易な課題ではあるまい。環境（自然）破壊を促す哲学を指摘できたにせよ、この哲学が弁証法的に次の時代の、あるいは同世代の環境（自然）破壊、保護を説く哲学出現の契機となることもあるであろう。いずれにせよ、一応東洋哲学よりは西洋哲学の方が環境（自然）破壊に対し責任があったといえる。たとえば、「われ思う。ゆえにわれ存す」と説くデカルトの哲学や「優勝劣敗、適者生存」を説くダーウィンの思想には自然哲学である東洋哲学には見られない人間中心主義的な、また差別的な趣がある。

では西洋哲学に人間中心主義的な傾向が萌し始めたのは一体いつ頃からであろう。ニーチェに基づいていえば、西洋哲学が人間中心主義的になったのは、ソクラテス以来のことであったといえるであろう。ニーチェは西洋哲学がソクラテス以来、人間を理性的存在とみなすようになったがゆえに生命が衰弱してしまったと、よってギリシアの初期に、自然哲学に帰れと、論じたのであった。自然哲学者のヘラクレイトスが自らの著書を捧げたとされる神は自然豊穡の神アルテミスだった。ソクラテスが崇拜した神は知恵の神アポロンだった。ここでアポロンが知恵の神であったとは、それは人間の理性が、人間中心主義が、強調されたこと、環境（自然）破壊が促され始めたこと、に他ならないのである。

西洋哲学界に傲慢な人間中心主義が見出されたとするならば、他方、人間の自我の除去、忘我、無私、別言すれば謙虚な人間非中心主義、環境（自然）破壊などとは無縁の思想もまたこの哲学界には織り込まれていたのであった。すなわち神のなかに消え失せ、われを失う神秘主義の流れが脈々として絶えなかったのである。そしてインド人であれ、アメリカ人であれ、ヨーロッパ人であれ神秘家たちが神秘体験について書いたものには、神と一体となり完全に魂が自我と縁を切るこの体験には、非常に共通するところがある。よく見れば多少の相違も見出されるが、共通性

こそが強調されるべきであろう。たとえば、ヒンドゥの哲学者たちの体験、18世紀アメリカのカルヴァン主義の神学者エドワーズの体験、ヘレニズムの神秘主義者、プロティノスの体験、19世紀アメリカの超絶主義者たち、エマソンやソローなどの体験、において見受けられるごとくに。

ソローの『森の生活』第4章では、彼の忘我の瞬間がたとえばこのように語られた——「夏の朝など、いつものように湖で水浴びをすませたあと、私は小屋の、陽のよく当たる戸口のところにすわりヒッコリーやウルシに囲まれ、静寂と孤独のなかで夢に耽っていた。西側の窓を照らす夕日や街道を行く旅人の馬車の音で時間の経過に気づいた。そういう時間に私は夜間のトウモロコシのように成長し……瞑想ということで東洋の人々が何をいおうとしていたかを理解したのである。(128)『森の生活』を事実上結ぶ第17章において、長く暗い冬が去り春が訪れたある日、ソローの小屋はとつぜん神々しい「光の束」で満たされソローが窓の外に目をやると、「昨日まで、灰色の氷に覆われていた湖が夏の夕空のように透明で穏やかな湖」に変わっていたのだった。(332) 作品の一貫性と文脈という点からいえば、ヒンドゥ思想が血肉と化していた、瞑想的な、忘我の状態のソローの神秘体験が「時の流れ」を離脱し、「夜間のとうもろこしのように成長」し、ついに自然の一部と化していたソローの体験がここで作品を事実上しめくりながら象徴的に語られていたのである。ソローは彼と彼の小屋（ソロー自身の象徴）のみならず、周辺の自然が一種の聖なる自然と化す体験をしていたのだった。今や、ソローはこの自然の一部となっていたのである。聖なる自然と溶け合っていたといえるのである。無我、忘我状態におけるエマソンでの聖なる存在との一致体験を示すならばエマソンは『自然論』で「夕方、雪でぬかるむ、ありふれた広場を横切っていると私は恐ろしいまでのよろこび」を味わうことがあったと、それは「森の中でも」同じことで森という「神の植林地には一種の神聖な清浄さが支配している」と、語る。(6) さらに続いてこういう——「へんてつもない大地に立ち私の頭を無限の空にもたげるとあらゆる卑しい我執は消え私は一個の透明な眼球となる。私は無と化す……。私は神の一部となっていたのだ」。(6) エマソンは「ありふれた」自然空間であれ、森の中であれ、およそいかなる自然環境でも「私」を「無」となし、「神（自然）の一部」とする、と述べているのである。ソローとエマソンの神秘体験もまた互いに共通する。しかしながら、ソローの場合では自身の神秘体験が同時に周囲の自然環境の変化をしばしば意味していた点においてエマソンには見られないダイナミズムがあるといえるだろう。

O (xford) E (nglish) D (ictionary) は神秘思想を簡潔に「忘我状態の瞑想による聖なる自然との一致の可能性に対する信仰」と定義する。ヒンドゥ教（哲学）であれ、何であれ神秘思想では「聖なる自然」との一致が予期されていたのである。自然環境は破壊されてはならない聖なる空間としての意味をもつものであったのである。ラテン語の *contemplatio* は予兆が示される聖なる空間に由来する。とするならば、およそいかなる神秘思想であれ、神秘思想には忘我、無私、人間中心主義からの離脱が、聖なる空間としての自然観が、見出される点において互いに相共通するといえるであろう。神秘思想には環境哲学の展開が予期されていたと想定されよう。

本論ではプロティノスに焦点を合わせる。プロティノスに及んでいるとみなし得るヒンドゥ思想や、プロティノスの伝統に立つと考えられる後代の思想との関係で彼の神秘思想のユニークな点を環境哲学的にできる限り浮き彫りしたい。プロティノスはアレクサンドリアの出身であり、さらに数世紀にわたってギリシアの哲学とオリエントの神秘思想の出会いの場であったアレクサンドリアで哲学を学んだ人物であった。よって、プロティノスの「一者」との一致の思想その他がヒンドゥ哲学の影響を受けていたにせよ、それは何ら不思議ではないはずである。じっさい、ヒンドゥ哲学すなわち、アートマン（自己）とブラーマ（宇宙我・創造原理）の一致を説く神秘思想には何かプロティノスの思想を想起させるものがある。今日、このヒンドゥ哲学は環境問題と深く関わる思想と考えられるようになった。ヒンドゥ哲学において、内なる我であるアートマンと創造原理ブラーマが同一であるということ、これはこの哲学で当然生命というものが本来一体とされていることを意味する。のみならずヒンドゥ哲学では世界と生き物とが一体であるとも説かれており、これは端的に共生の思想であり、環境倫理を考える上で有益な思想といえるのである。プロティノスの神秘思想とヒンドゥ思想との間に類似性を見出すことは、環境哲学的にプロティノスを考察する上で有益な示唆を得ることを意味したといえよう。またもし両思想の間に相異を見出すことができるならば、それはそれでプロティノスについての考察を重厚なものにしたであろう。

ヒンドゥ思想でのブラーマ神はプロティノスの哲学での一者に対応するといえる。プロティノスの『エネアデス』の英訳者アームストロングがいうように、プロティノスの「一者は世界の外ではなく、われわれの魂の中心に存在する」(I, xvii) ものであった。ヒンドゥ哲学においてもブラーマは世界のなかに存在し、われわれが魂の奥深くに住まいするアートマンと一致するとき、それはブラーマとの一致を意味するものであった。西洋の神秘主義では神秘家はヒンドゥ思想の場合と異なり、一人の人格を持った神との出会いを体験するのみならず、この神とは自然や人間の魂にありながらも世界を超越した存在だった。さらに生命は本来一体であると、また世界と生き物も一体であるとされているヒンドゥ思想、この有機的な思想とは、プロティノスを説明するアームストロングの表現を借りながらいえば、何か「汎神論的」な「とぎれない聖なる生命の連続」を説くプロティノスの神秘思想に似るものであった。(I, xxii, xi-xii) 物質界は生命ある有機的全体であると、さらに「形相の世界とは有機的な生命を持つ共同体」であると、論じるプロティノスの神秘思想に通じるものであった。(I, xxi, xxiv) プロティノスには一者である源泉からの聖なる実在の「絶えざる放射」(xi-xii)こそは彼の思想の最重要の部分だった。

すでに引いたように OED の定義では神秘主義とは「忘我状態の瞑想による聖なる自然との一致の可能性に対する信仰」を意味するものであり、「瞑想」と神秘主義とは深く結びついて互いに切り離し得ない関係にあった。じっさいプロティノスにおいてもあらゆることが一者たる源泉の瞑想いかんによるとされている。『コンコード川とメリマック川の一週間』(以下『一週間』と略す)でのソローによれば「西洋哲学と比べると東洋哲学では、はるかに瞑想の意義に関心」が持

たれており、よってソローはヒンドゥ思想の特色を「瞑想的」と説明し、アジアを「瞑想の国」と呼んだのだった。(130) プロティノスを含め神秘主義者の思想には、東洋的思惟に訴えかける何かがあるのである。しかし、プロティノスの神秘思想ではアームストロングもいうように瞑想の低い次元のものは不毛であると、一種の夢を見るにすぎないとされている。(I, xxiii-xxiii) 睡眠哲学とされるウパニシャッドでは、夢は決して不毛とされてはいない。ソローは朝において夜の眠りをふり返り、人間が真実の生活を生きるとは眠りにおいて自らのアートマンと一致した状態、“dreams awake” (『一週間』, 316) の状態、で生きることであると述懐していたのだった。

プロティノスにおいて、プラトンの実在、形相に他ならない思惟 Intellect は源泉たる一者から潜在力として発し瞑想において一者に再び戻る。このようにプロティノスの瞑想は深く Intellect と関わる。しかしプロティノスの瞑想についてはここで措き、彼の Intellect についてさらにいえば、それはアームストロングがいうように対象を直ちに把える思惟なのであり、「直感思考」(I, xvii-xviii, xxi) と呼ぶことのできるものだった。「論証思考」ではなかった。プロティノスの神秘思想では低いものが高いものの中に在るとされ、肉体は魂に、魂は Intellect に Intellect は一者に在る。(xii) Intellect がプラトンの形相の世界に属するものであるのに対し、魂は論証的世界に属するものだった。higher な魂が Intellect に属するとされているのである。

プロティノスの Intellect についての理解をさらに深めるならば、すでに述べたように彼の神秘思想では何か「汎神論的」な「とぎれない聖なる生命の連続」、「有機的な生命をもつ共同体」、一者である源泉からの聖なる実在の「絶えざる放射」について説かれていた。Intellect もまた一者たる源泉から発していた。プロティノスの Intellect は一者たる聖なる実在の「絶えざる放射」と深く結びついていたといえるのである、肉体は魂に、魂は Intellect に、Intellect は一者に在って、そこには、いわば「有機的な生命をもつ共同体」のごとき関係が成り立っていたのである、といえるのである。このようにプロティノスの Intellect が「直観思考」的思惟であり、「論証思考」的思惟ではなかったとするならば、さらにまた「汎神論的」な調子を含み聖なる実在と結びつき、「有機的」と呼べる知であったとするならば、それは、いわゆる西洋哲学的理性というものではない。人間を理性的存在として把らえない、人間中心主義を認めない知である。西洋哲学史を通観するならば、理性は感覚により、また感覚は理性により弁証法的反論を受ける関係にあったかに見える。しかし、永遠で普遍の理性を重んじ感覚を空しく流れ去るもの、たよりにならぬものとプラトンのようには見なさずイデア界と感覚界を分けず、すべて一つであるとしたプロティノスは、このとき感覚と理性とを一イデアとしての理性とを——一致させていたといえるのである。感覚をばイデアとしての理性と結びつけ高めながら救い出していたのである。プロティノスの Intellect とは感覚と結びつけられたイデアとしての理性であるとみなし得よう。プロティノスの Intellect が「直観思考」であり、「論証思考」ではなかったこと、これはプロティノスの Intellect が深く感覚とつながっていたことを最も端的に裏付ける。哲学史に見出される感覚の重視とはプラトンを本末転倒と考えたアリストテレス—あらかじめ感覚にとって存在しなかったものは意識

の中には存在しないと説いたアリストテレス—とプロティノスの伝統にあるといえよう。哲学史には汎神論思考、さらに有機的思考が深く微妙に織り込まれている。そしてまたプロティノスは時代の大きな変わり目に顔を出しインパクトを与えてきたといわれる。その主なゆえんは彼の思想が汎神論的で有機的であったことに、とりわけ大きく因ると想定される。哲学史に織り込められた種々の汎神論的、有機的思考もまたある程度プロティノスの伝統に立つものであろう。以下、哲学史における主要な感覚、汎神論、有機的思考を指摘してみよう。¹⁾ 感覚については特に理性—人間中心主義的理性—との関連で触れることにする。

古代末期から中世初期を代表するキリスト教徒のアウガスティヌスには一時期マヌ教、ストア派などの影響が及んでいた。そして結局、アウガスティヌスが最も傾倒したのはプロティノスであり、新プラトン学派であった。あらゆる存在は神に由来する本性を持っていると説くプロティノスにアウガスティヌスが傾倒したとは、アウガスティヌスが感覚（界）を軽んじていなかったことを意味する。神秘の教えであるキリスト教を信じるアウガスティヌスは理性とは限界のあるものであるともみなしていたのだった。とはいえキリスト教徒としての彼は、神と感覚（界）の間には断絶があるとも述べていたのであり、ここではプロティノスがはっきりと否定されたのであった。中世まっさかりの時代の哲学者、トマス・アクイナスは理性の助けによって聖書の真理と同じ真理を探れるとみなした。その点では理性を限界あるものとするのもあったアウガスティヌスと相違するといえるだろう。トマスによれば、信仰と啓示こそは人間が神にいたる確実な道であるがもう一つの道が理性なのであるという。しばしば中世は理性を過信した時代であるとされる。その主なゆえんは大きくトマスの思想に因るのであろう。

16世紀、ルネッサンスの時代は神中心の中世、人間の罪深さが強調された中世と対照的に人間中心主義の時代だった。それは古代ギリシアの人間中心主義の再生をめざしながらも、この人間中心主義の心の安らぎと自制心を欠き、何か無節操で個人主義的だった。だが人間の無限の可能性を信じ、殆んど宇宙意識的なルネッサンス人はあらゆる分野に才能を展開させた。経験的方法がとられ、自らの感覚にたよる研究がなされ、技術革命が行われ、もはや自然の一部ではない人間が自然を大いに利用し消費し始めた。哲学者ベーコンは“knowledge is power”と高らかに人間の理性を称揚した。だが、今日から見るとベーコンのこのような人間中心主義的な理性が環境汚染とゴミの山を生み出したことは否定し得ない。ベーコンもまたプロティノスの伝統には立たない。中世のように現世を天国の生のためとみなさなかったルネッサンス人は自然界に対してこれまでと異なる考え方をし始めていた。自然界が肯定的に眺められるようになったのみならず、神は自然界にもいると考えられるようになり、一種の汎神論が生み出され、ブルーノのごとき人物が登場することになった。ブルーノをプロティノスの伝統にある人物とみなしたい。

中世とはまことに理性主義的な時代だった。そして17世紀こそは合理（理性）主義が主流となる時代だった。ルネッサンスの自然と科学、神と人間に関する、入り乱れて收拾のつかない古い思想と新しい思想をデカルトは数学という理性を用いて『哲学体系』にまとめた。精確なリアル

な認識にいたるには数学によるべきであり、感覚はたよりにならないとみなした。スピノザもまたデカルトと同じく理性主義の伝統に立っていた。しかしスピノザは存在するものはすべて自然であるのみならず、神とは自然であると説いた。すなわち、スピノザは汎神論者であった。神の創造物を二つの実体、精神の世界と延長（物体）の世界に分けた二元論のデカルトに対し、実体をただ一つであり、神すなわち自然であるとしたスピノザは一元論であった。スピノザもデカルトも理性の哲学を展開したのではあるが、スピノザの哲学が汎神論であった点において、それはデカルトと相違するのみならず、プロティノスの伝統に立っていたといえるであろう。

18世紀となるや、17世紀の主流だった合理（理性）主義批判が英国哲学者たちによって始まった。ロックは人間が感覚経験することなしに意識の内容をもつことなどできないと、人間の思考内容と観念はすべて人間がかつて感覚経験したことのあるものの反映であると述べた。すなわち経験主義を説いた。とはいえ、色や匂いや味のような感覚は動物それぞれ、人間それぞれでちがっており、物体にそなわる本当の特性を再現するものではないとした。ものの重さ、形、数などはそれを再現しているとみなし、その点ではデカルトの延長（物体）の考えに一致した。ヒュームは経験主義の哲学者の中で最も重視された人物であった。彼は中世と17世紀の理性主義哲学が考え出した、あいまいな概念や思考の産物を打破することを自分の務めとした。たとえばヒュームによれば天使という概念は二つの別々の経験からできていて、人間の想像力のなかで勝手に複合されたものにすぎないという。ここでヒュームは現実にあてはまらない仕方観念が複合されていると、ちゃんとした感覚にさかのぼれない思考が展開されていると指摘していたのである。プロティノスがアイデアとしての理性を感覚と分けずひとつのものとしながら感覚を救い出したとするならば、ロックとヒュームはかつての理性を批判するかたちで感覚を救い出していたのである。いずれにせよロックとヒュームにおける感覚の救出はダイナミックである点において、まさにプロティノスの伝統にあるといえただろう。18世紀後期の大家カントは、フランス啓蒙主義者たちの合理（理性）主義も、ヒュームなどの経験主義も、それぞれある程度正しくある程度まちがっていると考えた。知識が感覚を通してやってくるとした点では、カントは経験主義者たちに似ており、感覚経験のとらえ方を決める前提条件が理性によるとした点では、彼は合理（理性）主義者たちに似ていた。カントの認識論では人間の認識には限界があると、認識する理性と自然とはきびしく区別されるべきであると、されていた。カントが感覚にも理性にも、それぞれ一役買わせ、いわば役割分担を定め、相方の立場をきちんと分けながら感覚と理性の問題を解決したとするならば、プロティノスは、感覚を理性・アイデアと分けたりせず一つのもののみならず、感覚救出のドラマを演じるかたちでその問題を解決したのであり、プロティノスはカントよりも力動的であったといえる。

18世紀の終わりから19世紀の中頃まで続いたロマン主義の時代は理性を重んじた18世紀啓蒙時代への反動としてドイツに興り感覚、感情、想像、体験を貴んだ。しかし他方人間の理性が認識に果たす役割をカントが強調したことで、この時代は人間の自我を無制限にあげた。するとロ

マン主義の時代の人々は自然とは一つの大きな自我であると主張し始めたのみならず、自然のなかで神に等しい自分自身を体験するようにさえなっていた。自らのルーツをたどりプロティノス、スピノザ、ブルーノなどの汎神論者たちを見出していたのだった。

シェリングなどの哲学者は自我を世界魂とも呼び、石から人間にいたるまで自然をば生命をも一つの有機体とみなしたのであった。ヘルダーなどは民族も歴史も自然と同じような可能性を開花させる有機体と考えた。ヘーゲルはシェリングを批判し、精神を持つのは人間だけであると、人間の表現としての世界魂という理性が歴史をつらぬいているのであると、論じた。ヘーゲル自身は真理を主体的であると説くキルケゴール、20世紀実存哲学に大きなインパクトを与えたデンマークの哲学者の批判を浴びた。ロマン主義の時代はかなり人間中心主義的、理性的であったにせよ、まことに感覚的、汎神論的で、有機的であり深くプロティノスとつながる画期的な時節だったといえるだろう。

人間の意識は物質的下部構造の産物であるとするマルクス、人間は長い生物進化の結果であるとするダーウィン、人間は無意識的、動物的衝動で行動するとするフロイト、彼らは19世紀から今日までの思想界に大きな影響を与えてきた、広い意味での自然主義者たち、別言すれば感覚を重んじ、人間を自然の一部として眺める、理性を当てにしない、人間非中心主義者たちだった。しかしながら、人間を自然界の頂点に位置する存在とする19世紀中頃から盛んとなる、いわゆる進歩の思想、この人間中心主義的思想の流れが今日の世界的規模の環境破壊、地球危機と深く関わるものであることは明らかである。人間中心主義的な、人間のための自然保護を目指す shallow Ecology などはすでに時代おくれとなった。スピノザの思想体験からインスピレーションを得たとされるアルネ・ネスによって提唱された deep Ecology の時代、すなわち人間であれ、山まであれ多様な一切に self-realization の権利を容認し、それぞれお互いの間に oneness の関係を見出しながら人間中心主義を超えた世界を志向する、西洋哲学的ソクラテスの伝統に疑問を抱く時代を今やむかえていたのである。アルネ・ネスが提唱した deep Ecology とは汎神論的なプロティノスの神秘思想と一脈相通するものだったといえるだろう。スピノザと共にプロティノスが現代によみがえっていたと考えられるであろう。あるいは deep Ecology とは時代の変わり目に顔を出してはインパクトを与えてきたプロティノスが真の登場を果たす前ぶれを暗示するものかもしれない。19世紀中頃から現代まで続くマルクス、ダーウィン、フロイトたちの思想の流れ、すなわち理性を当てにしない、感覚を重んじる、人間を自然の一部とみなす自然主義もその登場の前兆としての密かな用意とみなされないこともないだろう。

注

- 1) 本論での哲学史は Jostein Gaarder の簡明な著、*Sophie's World* (London: Phoenix House, 1995) に負うところが多い。さらに池田加代子の訳 (東京: 日本放送出版協会, 1997) も参考にしたが、多少の変更を加えたところがある。

Works Cited

Plotinus, ed., Jeffrey Henderson, Harvard University Press, 2000.

The Selected Writings of Ralph Waldo Emerson. ed., Brooks Atkinson,
New York : The Modern Library, 1950.

Thoreau, Henry David. *Walden*. New York : W. W. Norton, 1951.

… *A Week on the Concord and Merrimack Rivers*. Boston : Houghton Mifflin, 1961.

(2003年9月18日受理)